「同化」と「排除」

２２２２１２８０

工学部　電気電子情報工学科　渡辺悠斗

この映画は三世代にわたってあるハンガリーのユダヤ人の一家を描いている映画であるが、一世代目のイグナツの親の世代であるエマヌエルの代は映画を観たままの感想だと全く「同化」や「排除」というものはなかったように思えた。ＷＷⅠ以前の歴史を考えるとオーストリア＝ハンガリー帝国ではユダヤ人が急激に増加し、ユダヤ人の社会的地位が最も向上していた時代であったことが描かれていると感じた。実際、映画内では父親亡き後若くから一家を支え醸造業を起こし、薬草酒で大成功しているのからも推測できると思う。（細かく言うと一世代目のイグナツも最初からユダヤ人として苦労してきたわけではないが。）

最初に「同化」が映画内で描かれたのは法律家になったイグナツが裁判官としてのさらなる地位の向上を考えハンガリー風に改姓した場面である。この時点でユダヤ人の差別は再度始まっていたのだろう。言ってしまえば同化が悪化したり同化を拒否したりしてしまえば排除になるので同化＝排除とも言え、既に排除もあったと言える。いったんＷＷⅠ前まではこの程度で済んだのだが、ＷＷⅠ後から状況はどんどん悪化していった。

イグナツに限った話だが、彼はオーストリア＝ハンガリー帝国を支配している皇帝に心酔していて皇帝派よりの判決を繰り返していた。その結果ＷＷⅠ後の革命による独立がきっかけで糾弾されることになった。イグナツに関して言えばユダヤ人であったからこその扱いや待遇を受けたわけではなく自身の皇帝よりの強い思想がもたらした結末とも言えるだろう。しかし二世代目のアダム兄弟の時期からさらに状況は悪化していった。

ＷＷⅠ後、アダムの幼少時代では既にユダヤ人であるというだけで暴力を受けたり周りのハンガリー人と同等の権利を与えられなかったりしていた。正直ユダヤ人が本格的に差別され始めた理由は映画を観ただけでははっきりとはわからなかった。しかし、講義で聞いた中に、ユダヤ人の台頭に対して伝統的な貴族などの反発があったり、反ユダヤ主義のプロパガンダによるユダヤ人に対しての偏見がＷＷⅠでの反乱などの原因にされたりしたことがＷＷⅠ後の混乱に伴い爆発していったのだと思った。ユダヤ人の差別は１９世紀にいきなり始まったわけではなく長い歴史があるもので、歴史は繰り返すという言葉がぴったりだなと感じた。映画の話に戻るが二世代目のアダムは兄に勧められたフェンシングで才能を開花し国で活躍することになっていくが、ここでもユダヤ人に対する差別が描かれていた。アダムがフェンシングの国内大会の決勝でユダヤ人であるというだけで得点を無効にされ相手の得点にする誤審があったのだ。この映画はノンフィクションではないはずなので当時の現状は定かではないがこのような事例も当然のようにあり、現実ではもっとひどい差別があったのだろうと思った。

そしてその後アダムはオリンピック選手になるために改宗を余儀なくされた。これがアダムの世代での最初の「同化」と言えるだろう。このあたりからユダヤ人≒ユダヤ教という認識は変わっていったのだと思った。やがてＷＷⅡが始まりユダヤ人の迫害が激化していく中で真っ先に思い浮かぶのはナチスドイツだ。映画の中ではイグナツの時代では改姓、そしてアダムの世代では改姓に加えて改宗、ＷＷⅡ中には改姓、改宗だけではユダヤ人（≠ユダヤ教）は権利を認められず、ユダヤ人の中でもさらに名誉・名声を持つ者だけが権利を認められた。この事実だけを聞くとユダヤ人の差別は本当に考えに一貫性がなく無駄なものだったと感じる。元々のユダヤ人はユダヤ教を信仰しているという理由で思想に関しての偏見・差別だったと思うが、イグナツの時代では改姓だけで済むような描かれ方をしていたので思想ではなく人種としての偏見・差別だったと思われる。この時点で少し疑問が生まれるが、アダムの時代では改宗が要であったことからまた思想面での偏見・差別が連想され、その後は名誉・名声を持つ者は権利を認められ、ユダヤ人の定義も曖昧で何世紀にも渡って理不尽な迫害を受けていたユダヤ人のことを考えるとなんとも複雑な気持ちになる。当時の人たちの認識や文化、考え方はわからないが映画を観た私目線では、いかなる時代でも鬱憤晴らしという目的の元に迫害が黙認されてきたとしか思えなかった。

映画の話に戻るとアダムはその後オリンピック優勝者であるという条件を満たしていたにも関わらず、一般のユダヤ人と同じようにファシストによって収容所に連れさられて、ひどい拷問によってなくなってしまった。結局最後にはナチスドイツなどによる人種至上主義に基づいた合理性・論理性を欠く思想によって大量虐殺という最悪な「排除」の結末を迎えてしまった。アダムは拷問で亡くなる場面で、拷問を受けながら自身はオリンピック優勝者のユダヤ人と主張を続けていたシーンはとても印象に残っている。その後アダムの息子のイヴァンは父を殺したファシストへの復讐を果たそうと奮闘していき、「同化」や「排除」はなくなっていった。

　作品を通して「同化」がまず必要とされていき、最終的に「排除」に向かっていくという印象を持った。まずＷＷⅠ以前では、「同化」といっても最初は必ずしなければならないというものではなく、生きていく上ではしなくても大丈夫というものであった。生活をより豊かにするためには「同化」は必要なものであっただけで、「同化」をしたからと言ってそこではまだ自らのユダヤ人としての誇りやアイデンティティを捨てたわけではなく、心はユダヤ人そのままであったが、ＷＷⅡ以後、改宗が強要されるなどの「同化」や「排除」が進みユダヤ人としての存在そのものが許されなくなっていき、生きるために自分を捨てなければならなくなった。「同化」、「排除」は生きやすくするためのものから生きのびるためにするもの、させられるものになっていった。

　映画を観て、アダムが収容された時にただのハンガリー人と主張していれば助かったのかという疑問や、アダムがオリンピックで誤審されていた時のような事例で実際どのようなものがあったのかなどは気になったがユダヤ人の迫害、「同化」、「排除」の歴史の流れを知ることができた。